「満洲引揚資料」を未来へつなぐために

加藤聖文 / 国文学研究資料館 准教授

経済経営研究所には「満洲引揚資料」という珍しい資料がある。かつて満洲には一五五万人にのぼる日本人が住んでいたが、彼らは一九四五年八月の敗戦によって現地に取り残された。彼らが日本へ引揚げるのは翌年の春以降、その間は実質的な「難民」だった。引揚げるまで、実に二五万人近くの犠牲者を生んだ。

記録というものは、勝者によって作られるものであって、敗者による記録は稀である。満洲国崩壊後の敗者となった日本人は一体いかなる状況下に置かれ、彼らはいかにして生き残ることができたのか、またはどのようにして死んでいたのか、公文書はもちろん、個人が書き留めた日記、彼らを映し出した写真やフィルムといったリアルタイムな記録はほとんど存在しない。

一方、人間は自己の体験を何らかの形で残したいと願うものである。とりわけ戦争のような生死の境をさまよった強烈な体験をした場合はなおさらである。結果として、自らの体験を人に語ったり、文字化して記録に残したりする。ただ、これらはすべて個々人によるバラバラな記憶であって、体験者すべての記憶を集めれば、全体(歴史)が見えてくるわけではない。しかも、時間が経ってからの回想は、記憶間違いはもちろん、しばしば体験時ではなく、その後の回想時の社会的価値観の影響を意識的・無意識的に受けるものである。

歴史学はリアルタイムに当事者によって作成された記録（一次資料と呼ばれる）を基にして当時の歴史の実像に迫ろうとする。しかし、満洲引揚に関しては、一次資料が決定的に少ない－というかほとんど無い。そのため、これだけの歴史的重大事であっても、その実態も背景もほとんど明らかにできていない。

私は大学院の頃、満洲を含めた引揚研究をやってみようと思ったものの、文献史学の枠組みから大きく外れた対象にどのように接近できるか試行錯誤の連続であった（三〇年経った今でもまだ試行錯誤中かもしれない）。

満洲引揚に関しては、『満蒙終戦史』という公刊された「引揚史」があり、これが研究の基礎文献だ。しかし、これはあくまでも戦後に引揚げてきた人たちの証言などを基に編纂された文献であって、リアルタイムに作成された「一次資料」ではない。一般的には本としてまとまっていた方がわかりやすいし、それですべてがわかるのではと思われがちだが、歴史学からすれば第三者による「加工品」であって、資料の解釈ミスや意図的な読み替えがあるかもしれない。誰の手も加わっていない素材が何よりも重要だ。『満蒙終戦史』はどんな素材（資料や証言）に基づいて、どのような意図で編纂されたのか、それを知らずに無批判に使うことはできない。

東京の新橋に国際善隣協会という満洲引揚者の団体がある。ここは『満蒙終戦史』を編纂した満蒙同胞援護会を継承した団体だった。引揚研究を始めた頃、いかにも昭和っぽいビルに行って資料がないか尋ねたことがあった。しかし、資料はすでに拓殖大学へ寄贈したとのこと。だが、拓大に寄贈されたものはいくつかの一次資料はあったもののほとんど書籍で、『満蒙終戦史』の元資料は見当たらなかった。

ただ、資料というものは思いが強ければ不思議な縁で見つかるものだ。『満蒙終戦史』の元となった満洲引揚資料に巡り会えたのも滋賀大学の阿部安成さんとの偶然ともいえる縁による。

資料は、国際善隣協会から流出し、偶然の積み重ねで滋賀大学に「たどり着いた」ものであったが、今から振り返ると、散逸したり、行方不明になったり、放置されたりもせず、整理されて誰もが利用できるようになったことは、資料にとって幸運だったと思う。

資料は使われてこそ生きていく。ただ、そのためにはいくつかの幸運が重ならなければならない。なかでも人が大切だ。器(経済経営研究所)だけがあっても駄目でその器に入れて新しい息吹を与えるのは人(阿部さんや江竜美子さん）でしかできない。そして、その新しい息吹を与えられた資料をさらに生かしていくのも人(利用者)だ。

満洲引揚資料が、今日あるのも人との縁に恵まれてこそだが、反面、人との縁が途切れてしまうと資料は死んでしまう。これからも人との縁が続き、資料が生き続けていくことを願ってやまない。